

平成21年 4月30日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18330181
 研究課題名（和文） 高等教育のマス化・ユニバーサル化と学生文化の変容に関する歴史社会学的研究
 研究課題名（英文） Historical sociology on Transformation of student culture from Elite to Mass to Universal Access Higher Education
 研究代表者
 竹内 洋（TAKEUCHI YO）
 関西大学・文学部・教授
 研究者番号：70067677

研究成果の概要：

学生生活調査や校友会誌、新聞記事、書簡集、小説などを資料として1930年代、1960年代の学生文化の転換点を明らかにした。これらの作業にもとづいて、明治期から現在にいたる学生小説の流れを確認し、代表となる学生小説を選定して各時代の特性についてまとめるとともに、学生文化の構造的変容を明らかにした。

これらから、戦後日本社会における知識人界と「学問」の変容についてそのダイナミズムを描き出し、現在の社会における大学と大学界のゆらぎについて検討した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,400,000	0	2,400,000
2007年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
総計	5,800,000	1,020,000	6,820,000

研究分野：歴史社会学

科研費の分科・細目：教育社会学

キーワード：学生文化、高等教育、歴史社会学、文芸社会学、学生生活調査

1. 研究開始当初の背景

日本の高等教育進学率は1980年にすでに50%を超えており、大学・短期大学だけでも昨年度ついに50%を超えて、M. トロウのいう「ユニバーサル段階」へと突入した。だが一方で、「大学で何を学ぶのか」、「何のための学問か」が繰り返し問われ、教養崩壊の時代と言われたり、あるいは大学卒業後も定職に就かないフリーターやニート、社会との接点を持ってない引きこもりの若者が増えるなど、大学と社会のあいだ

の齟齬が原因と思われる問題が顕在化している。

ひるがえってみれば、こうした大学と社会のありかたに関する問題の淵源は1930年代、あるいは1960年代に遡ることが可能である。1930年代は、高等教育への進学率が高まりはじめた第一期の大学「マス化」の時代である。一方の1960年代とは、大学進学率が男子で15%を超えた、「ユニバーサル化」の入り口の時代にあたる。

この2つの時代には、それぞれ、マルク

ス主義的教養主義の隆盛と左翼思想の弾圧、大学紛争の激化と鎮圧という、大規模な大学と社会との摩擦が生じ、学生文化が大きく変容しはじめた時期でもある。1930年代の変動の構造は、社会変革運動との親和性をもった学生文化が肥大しすぎた結果、社会からの圧力を受けて文化的に回帰した過程と捉えることができる。また、1960年代の変動は大学における学問の存立そのものをめぐる闘争であり、学生運動の敗北に伴い、キャンパスは一気に大衆文化の様相を帯び、「しらけ」た空気が蔓延することとなった。

「大学全入時代」を迎えた現在、こうした視点から、大学と社会の関係を改めて問い直す必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、1930年代と1960年代という2つの高等教育拡大の画期を中心として、量的データを中心に、小説、日記、自伝、インタビューなど質的なデータを用いて各時代の学生文化の特質をとらえ、現在におよぶ日本における学生文化の展開と変容について明らかにすることを目的としている。

さらに、学生文化の構造的変容、学生文化の内実やその類型の変容について、そのダイナミズムを解明することを通じて、学生紛争が何を意味し、どのような帰結をもたらしたのか、あるいは現代のフリーター・ニートや引きこもりなど若者をめぐる社会的問題の深層について考察するものである。

3. 研究の方法

本研究は、学問や思想、生活についての各種学生調査や文芸小説・手記・日記などを用いて歴史社会学的手法や文芸社会学的手法を用いて、多角的に解明する。

具体的には、(1)文部(科学)省および各大学が実施した学生生活調査の収集および分析、(2)学生小説、キャンパス小説の収集及び分析、(3)女子の学生文化に関する分析、という3つの作業班に分かれてそれぞれの分野の研究を進めるとともに、研究会を開催し、各分担者の研究経過を報告して全体の研究計画の調整をはかった。

4. 研究成果

(1)学生生活調査の収集および分析

①関西にある私立大学の学生生活調査について、1963年～1988年の結果表の再集計および1998～2005年の個票データの分析を行なった。読書傾向や学習時間を東京大学や京都大学の学生生活調査の結果と比較した結果、中堅私立大学のキャンパス・

カルチャーは大学進学率の上昇にともなう、むしろ東大・京大のキャンパス・カルチャーよりもマス・カルチャーとの類似性が高まってきたことが示された。

②京都帝国大学の校友会について、関係資料を用いて創立から1930年代にかけての組織の変遷をまとめ、旧制高等学校や帝国大学における課外活動組織の位置づけや役割に関する分析を行なった。

③校友会や寄宿舎といった学生の「課外活動」について、その成立期の史料を洗い直し、学生の動きと大学側の関与や対応を丁寧を追うことで、学生の自治という視点から学生文化の源流を明らかにした。

④文部省資料をデータ化して1900年代前半の在外研究員の動向を把握し、高等教育において海外渡航留学生や留学生制度が及ぼしうる影響についての分析を行なった。

(2)学生小説、キャンパス小説の収集及び分析

①1930年代の新聞における学生の自殺報道記事を収集し、太宰治を軸にして「自殺学生像」の構築や変容についての分析を行なった。

②旧制第一高等学校および東京帝国大学に在籍したある詩人の書簡(1927-1938)から、1930年代の学生文化の諸相を読み取った。

(3)女子の学生文化に関する分析

①高等女学校の卒業生調査から「女学校文化」は、その思想性や社会性から距離をおいた特性が羨望と忌避の源であることが示された。一方、近代日本社会において、特に初期の女子の中・高等教育機関を牽引したミッション・スクールは、西洋知の発信基地としてあこがれの存在でもあり、かつ、「シャドウ」として近代日本社会のイデオロギーを照射していたということが示された。男子学生文化の「欠如」とも、また、男子学生文化よりも崇高で純粋な文化とも捉えることのできるこのような女子学生文化は、学生文化や学生文化論に対する新たな分析視角でもある。

②明治期から大正中期にかけての高等女学校同窓会誌にもとづいてデータを作成、分析し、高等女学校卒業生にとって、在学時につくり上げた友人関係や女学校文化、女学校卒という学歴が、卒業後にどのような意味や機能をもっていたのかについて、階層的視点を踏まえて考察を行なった。

これらの作業にもとづいて、明治期から現在にいたる学生小説の流れを確認し、代表となる学生小説を選定して各時代の特性についてまとめるとともに、学生文化の構造的変容を明らかにした。

また、戦後日本社会における知識人界と「学問」の変容についてそのダイナミズムを描き出した。

プロジェクト最終年度となる2008年9月には「学生文化の変容と終焉—煩悶からレジャーへ」というタイトルでシンポジウムを開催した。このシンポジウムにより、現代の学生文化を中心としてこれまで教育社会学において明らかにされてきた実証的知見に依拠しつつ、比較文化研究および歴史社会学的研究、文芸社会学研究といった多様な分析視角から今後、学生文化研究を深化させてゆく意義と方向性が示された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 9 件)

- ①竹内洋「革新幻想の戦後史①〜」『諸君!』(査読無) 2007年12月号〜2009年4月号。
- ②富岡勝「「三高の自由」と「京大らしさ」—上横手雅敬氏インタビューで知ったこと、考えたこと—、鈴木晶子『「京都大学らしさの根源を探る」調査研究報告書』(平成20年度京都大学総長裁量経費研究プロジェクト「大学のアウトリーチ活動の方法開発に関する教育学研究」個別研究報告書3、査読無)、2009年3月、32-37頁。
- ③井上好人、「明治期高等女学校卒業生における同窓会活動の意味と機能—石川県立第一高女同窓会誌の「会員消息」記事の分析から—」『教育社会学研究』(査読有) 第83集、2008年、149-168頁。
- ④富岡勝「東京府尋常中学校における校友会の成立」『中等教育史研究』(査読無) 第15号、2008年、1〜15頁。
- ⑤竹内洋「中堅大学よ! 負け犬になるな 東大・京大との分断化を決定づける「これでいいのだ」文化」『中央公論』(査読無) 122(2)、2007年、41-49頁。
- ⑥稲垣恭子「『文学少女』のゆくえ」『教育と医学』(査読無) No.652 (第5巻10号)、2007年、32-39頁。
- ⑦稲垣恭子「『帝大生』という表象—明治二〇年代の学歴詐称事件をめぐる—」『学士会会報』(査読無) No.866、2007年、127-132頁。
- ⑧Kyoko Inagaki, Challenging Issues Facing Japanese School Education. In “Collection of Papers I, The First Forum on Sociology of Education at Beijing Normal University.” 2007, pp.205-211.
- ⑨竹内洋「明治学校システムと漱石 宙吊りという特権」『国文学』(査読無) 3月号、2006年、12-15頁。

[学会発表] (計 6 件)

- ①佐藤八寿子「阪神間女子中高生のファッション行動にみる差異化戦略—ファミリアのバッグを例に」、日本教育社会学会第60回大会(2008年9月19日、上越教育大学)。
- ②井上好人「旧制高校における校風改革運動の勝者と敗者—四高の「超然主義」の神話と「寒潮」事件から—」日本教育社会学会第60回大会(2008年9月19日、上越教育大学)。
- ③稲垣恭子「学校教育面臨的挑戦」(Challenging Issues Facing Japanese School Education), International Forum on Sociology of Education (16~18, Nov.2007, Beijing Normal University, China).
- ④末富芳「貧乏帝大生はどれくらいいたか? : 昭和初期学生生活調査における「苦学生2割5分説」の検証」、日本教育社会学会第59回大会(2007年9月22日、茨城大学)。
- ⑤石井素子「戦間期を中心とした文部省在外研究員の動向について」、日本教育社会学会第59回大会(2007年9月23日、茨城大学)。
- ⑥山口晃子「戦後日本における大学生文化の時系列的研究—京都大学『学生生活実態調査報告書』(1965年・1985年・1995年)と関西大学『学生生活実態調査報告書』(1965年・1985年・1988年・1995年)の比較を中心に—」、第3回日本語日本文化教育研究会(2006年9月16日、大阪外国語大学)。

[図書] (計 8 件)

- ①竹内洋『学問の下流化』中央公論新社、2008年10月、302頁。
- ②目黒強「谷崎潤一郎『細雪』にみる接触空間におけるモダンガール表象のアポリア」緒形康・田中康二編著『一九三〇年代と接触空間—ディアスポラの思想と文学』双文社出版、2008年、17-41頁。
- ③竹内洋『大学という病』中公文庫、2007年7月、346頁。
- ④竹内洋『改訂版 学校システム論』放送大学教育振興会、2007年、218頁。
- ⑤岩永雅也・稲垣恭子編『教育社会学』放送大学教育振興会、2007年4月、247頁。
- ⑥稲垣恭子『女学校と女学生』、中央公論新社、2007年2月、246頁。
- ⑦稲垣恭子編『子ども・学校・社会—教育と文化の社会学』、世界思想社、2006年12月、303頁。
- ⑧佐藤八寿子『ミッション・スクール—あこがれの園』中央公論新社、2006年、246頁。

[その他]

合同シンポジウムの開催

「ふたつの学生文化研究会合同シンポジウム
学生文化の変容と終焉—煩悶からレジャー
へ—」2008年9月27日、京都大学総合研究2
号館第一講義室。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹内 洋 (TAKEUCHI YO)
関西大学・文学部・教授
研究者番号：70067677

(2) 研究分担者

稲垣 恭子 (INAGAKI KYOKO)
京都大学大学院・教育学研究科・教授
研究者番号：40159934

(3) 連携研究者

細辻 恵子 (HOSOTSUJI KEIKO)
甲南女子大学・人間科学部・教授
研究者番号：90199505
目黒 強 (MEGURO TSUYOSHI)
神戸大学大学院・人間発達環境学研究科・
准教授
研究者番号：70346229
末富 芳 (SUETOMI KAORI)
福岡教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：40363296
佐藤 八寿子 (SATO YASUKO)
神戸ファッション造形大学・ファッション
造形学部・講師
研究者番号：10412115
富岡 勝 (TOMIOKA MASARU)
近畿大学・教職教育部・准教授
研究者番号：50303798
高山 育子
東海学院大学・人間関係学部・講師
研究者番号：30440572

(4) 研究協力者

井上 好人 (INOUE YOSHITO)
金沢星稜大学・人間科学部・准教授
石井 素子 (ISHII MOTOKO)
京都大学大学院教育学研究科博士課程
野口 剛 (NOGUCHI TSUYOSHI)
京都大学大学院教育学研究科博士課程
山口 晃子 (YAMAGUCHI AKIKO)
関西大学大学院文学研究科博士課程